

重厚な防音扉が閉まった瞬間、耳が痛くなるほどの静寂が室内に満ちた。ネオンが明滅する夜の街を見下ろす、会員制カラオケの最上階に通された。そのVIPルームは、カラオケボックスとは思えないほどの高級感で、最高級の革張りソファと、冷え冷えとした空気感に支配されていた。

(……怖い。でも、なんとかしなきゃ……私が、やるしかないんだから)

私の目の前には、グループをまとめる若社長である滝矢さんが座っている。

オーダーメイドのダークスーツを一切の隙なく着こなし、長い指でグラスを傾けるたび、琥珀色の液体が静かに光を揺らす。その仕草ひとつひとつが洗練され、まるで計算し尽くされた舞台的一幕のようだった。

「……あの、滝矢さん。この度は、弊社の部長が多
大なるご無礼を働き……本当に、申し訳ございませ

んでした……っ！」

私はソファの前で、床に膝をつかんばかりの勢いで深く頭を下げた。先日の会食で、私の上司が酔った勢いで滝矢さんの機嫌を決定的に損ねてしまったのだ。

もしこのまま彼に縁を切られれば、うちのような中小企業は一瞬で倒産してしまう。

そのため、滝矢さんへの謝罪に、なぜか名指しされた私は、指定された場所へ一人で来ていた。

「謝罪か。……口先だけなら、誰でもできるな」

滝矢さんは手元のグラスを揺らし、冷徹な双眸で私を見下ろした。その声には、一切の容赦がない。

「……っ、なんでもします！ 私にできることなら、どうか、どうかお申し付けください……！」

必死の思いで顔を上げると、滝矢さんはフッと口

角を上げた。それは、獲物を追い詰めた猛獣が浮かべる、残酷な笑みだった。

「なんでも、と言ったな？ ……なら、俺が満足するまで、ここで歌え」
(……えっ？ 歌う……？)

滝矢さんは手元のリモコンを無造作に操作し、壁一面の巨大モニターに、とあるラブソングの予約を入れた。

ズン、ズンと心臓を直接揺さぶるような重低音のイントロが鳴り響く。部屋の明かりがゆっくりと落ち、青白い光が私の青ざめた顔を照らし出す。

「お前が俺を愉しませることができたら、今回の件は不問にしてやる。……だが、俺を退屈させたら、その瞬間に契約は打ち切りだ。お前の会社も、あの上司もな」

(そんな……っ！ 私がここで歌わなかったら、会社のみんなが路頭に迷っちゃう……。でも、なんと

か歌わないと……っ！)

逆らえない威圧感に押しつぶされそうになりながら、私は震える手でマイクを握りしめた。モニターには、今にも甘い歌声が聞こえてきそうな、恋の歌詞が流れ始めている。

「一曲でいいから、歌い切ってみろ」

「……わかり、ました……っ」

(やるしかないんだ……。歌えばいいんだよね？
歌うだけで、みんなが助かるなら……！)

覚悟を決めてマイクを口元に寄せた、その瞬間。隣に座っていたはずの滝矢さんが、音もなく私の背後に回り込んだ。逃げ場を塞ぐように、大きな手が私の細い腰をぐいっと強引に引き寄せる。

「あ……っ！」

(近い……っ！ 背中から、滝矢さんの熱い体温が伝わってきて……心臓が、壊れそうなくらいバクバ

クしてる……っ！)

「どうした。歌えと言っただろう。……ほら、口を動かせ」

耳元で、熱い吐息と一緒に、低くて抗えないほどの色っぽい声が響く。それと同時に、滝矢さんの大きな指先が、私のうなじをゾクゾクするほど冷たく這い上がった。

「……ずっと、そばにいて、欲しいから……♪」

震える声を絞り出し、なんとか歌詞をなぞる。その歌い出したすぐ後、不意に滝矢さんの指先がゆっくりと、首筋をなぞった。そのまま手が鎖骨をなぞり、そのまま柔らかいおっぱいへと滑り降りてくる。

むにゅ♡

「ひ、あ……っ、んう……っ♡」

(……っ！ つ、掴まれた……♡ 滝矢さんの大きな手が、私のおっぱいを……っ！♡)

「どうした？ 歌詞が違っているようだが？」

からかいを含んだ声が、耳を震わせる。滝矢さんの大きな掌が、薄いブラウスの上から私の左のおっぱいを、むにゅう♡と力強く掴み上げた。

「♪この……お、も……い、を……っ、ひぁあッ♡」
(そ、そんな♡ こんなの、歌えるわけない……っ
!♡)

「……声が止まっているぞ。きちんと歌え♡」

そう言いながら、滝矢さんは手のひらの力を強めた。そして感触を確かめるように、指先をおっぱいの肉に深く食い込ませ、不規則に揉み解していく。

むにゅう♡ ぐにい♡ むにゅむにゅ♡

「ふ、ぁ♡ あ、い……を、誓う……から……っ♡
は、ん……っ、ん、ぁ……っ♡」

歌おうとするたびに、おっぱいが強く押し潰され

る。滝矢さんの指が、ブラウスとブラジャーの布越しに、右の乳首をピンポイントで捉えた。

コリッ♡

「ひっ！♡……あ、んうッ♡」

「随分と敏感な乳首なようだ。まだ少ししか触っていないというのに。布の上からでも分かるほど硬く尖り始めているぞ」

「ち、ちが……っ♡ ふ、ぐうッ♡ そんな……っ、ん、んう……っ♡」

コリ♡ コリ♡ コリ♡ ぐりっ♡ ぐりぐり♡

容赦のない刺激。指先で乳首を弾かれ、そのまま円を描くように執拗に弄り回される。

「♪……あ、なた……の♡ んぁあっ♡ ひ、瞳、にッ♡ あ♡ あんッ♡」

「……リズムが乱れているぞ。お前の乳首がこんなに悦んでいるのに、歌の方は随分と疎かになっているようだな」

「あんっ♡ ああ♡ だめっ♡ たきや、さん……っ♡
こりこり、しないで……っ♡」

「歌詞が違うようだが？」

滝矢さんは私の懇願を無視し、今度は両手で私の
左右のおっぱいを同時に、むにゅ♡ と驚掴みにし
た。

むにゅ♡ むにゅ♡ ぐにい♡ むにゅうう♡ むに
ゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「ひあっ♡ ん♡ ああっ♡ ん、あっ♡ ああ……っ
♡」

「ほら、もっと声を張り上げろ。謝罪のための歌だ
ろう？」

「♪……あ、なた……の……ん、あ……っ♡ ひ、
瞳……に……っ、あ、あ……んッ♡」

歌詞の合間に、抑えきれない吐息混じりの喘ぎが、
どうしても混じってしまう。

なんとか手を止めてほしいと思うけれど、滝矢さ

んの手は止まらない。今度はブラウスのボタンを強引にいくつも外し、ブラを上へとずらされた。そして私の剥き出しになったおっぱいへと指を滑り込ませた。

にゆるり♡

「ひ、い……ッ！？♡ な、直接……っ！♡ あああ♡ んっ！♡」

「……ふむ、直接触れるとさらに熱を帯びているのが分かるな♡ 乳首にも触りやすくなったな♡」

指先が、直接乳首の先端をカリ♡ と爪でなぞる。
カリッ♡ カリ♡ ぴくん♡

「あッ♡ あ、はあ♡ ん、んんっ♡」

「ほら、しっかり歌え。止まるたびに、この乳首を捻ってやるぞ♡」

「や、あっ！♡ ひ、いんっ♡ ♪……あ、い……を、ちかう♡ ほ、ほほ、えんで……んんっ！！♡♡」

剥き出しになったおっぱいに、滝矢さんの大きな掌が直接吸い付く。指先がしっとりと吸い付くような生々しい感触に、背筋がゾクゾクと震えた。

むにゆる♡むにゅう♡ぐにぐに♡むにゅむにゅ、むにゅう♡

「ひあっ♡ふあはあっ♡あ、あん♡♪君、がっ♡はんああっ♡んん♡ああっ♡」

「歌えていないぞ。そうしたら、ここを捻ると言ったはずだ」

滝矢さんの指が、熱を持ってピンと硬くなった右の乳首を、親指と人差し指で挟み込んだ。そして、ぐりぐり♡と捻った。

「ひあっ♡あんんう♡あ、ひ♡い、痛い、です♡」

「痛いかな？ 本当に？ お前の乳首はこんなにピンピンに硬くなって、もっと触ってほしいと言っているようだよ♡」